I Kings 1:1-53

Ⅰ列王記
イントロダクション

ⅠとII列王記は、二部に分かれているサムエル記、列王記、歴代誌3巻の書物のうちの二番目のものです。もともとは、それぞれの書物は二部に分かれていませんでした。七十人訳の翻訳者たちが、多かれ少なかれ読者の便宜のために二部に分けたのです。おそらくそれは、とても賢い決定だったと私は思います。

著者は分かっていませんが、ⅠとII列王記が書かれたのは、最初の神殿がまだ建っていたときでした。（I列王記8：8参照）

（I列王記8：8）「そのかつぎ棒は長かったので、棒の先が内堂の前の聖所から見えていたが、外からは見えなかった。それは今日までそこにある。」

伝統的には、エレミヤが著者と考えられていますが、現在の学者たちは「預言者たち」が書いたものとしています。

列王記のテーマは、I列王記に9回出てきますが、「彼の父、ダビデのように」という表現の中にあります。言い換えれば、私たちはダビデの家系を追っているのであり、ひとりひとりの王が、ダビデによってすえられた基準に照らされているのです。とても正直に言うと、これは人間の基準であり、世界でもっとも高い基準というわけではありませんでした。それでも、王たちは次々とその基準さえも達成することに失敗します。感謝なことに、その基準に達する者たちもいました。でも、聖書のこの部分は、情けなく、汚れた部分であることが分かります。これは歴史です。そしてこの歴史は王国の衰弱と崩壊を明らかにします。まず、王国は分裂し、そのあと両方の王国は崩壊します。

このⅠとII列王記の要点をまとめているカギとなる節があります。最初のカギとなる節は、北王国の衰退と崩壊を説明しています。

（II列王記17：22－23）「イスラエルの人々は、ヤロブアムの犯したすべての罪に歩み、それをやめなかったので、ついに、【主】は、そのしもべであるすべての預言者を通して告げられたとおり、イスラエルを御前から取り除かれた。こうして、イスラエルは自分の土地からアッシリヤへ引いて行かれた。今日もそのままである。」

第二のカギとなる節は、南王国の崩壊を説明します。

（II列王記25：21）「バビロンの王は彼らを打ち、ハマテの地のリブラで殺した。こうして、ユダはその国から捕らえ移された。」

I列王記には、王国の“分裂”が記録されており、II列王記には王国の“陥落”が記録されています。両方をひとつとして考えると、列王記はダビデ王をもって始まり、バビロンの王をもって閉じます。列王記は、神さまの御国に対する人間の支配の本です。そしてもちろん、結果はよくありません。祝福と利益が神さまの民に施されるためには、地上の王座が天の王座（訳注：つまり神さま）と協調していなければなりません。これから見ていくように、人間の計画が神さまの目的を打ち壊してはならないのです。

ⅠとII列王記は、実際、ⅠとIIサムエル記に始まった物語の続きです。この4つの書物は、全部でひとつと考えることができます。なぜなら、この4つの書物はこの国の歴史を、ダビデとソロモンのもとでの最大の領土、影響力、そして繁栄のときから、分裂と両方の王国の捕囚のときまで追っているからです。

サムエル記と列王記の道徳的な教えは、人間には自分自身も、この世も治めることができないことを示しています。この4つの歴史書には、イスラエル王国のとても写実的な興隆と崩壊が書かれています。

Ⅰ、II列王記アウトライン

Ⅰ. ダビデの死。Ⅰ列王記1－2章

II. ソロモンの治世の栄光。Ⅰ列王記3－11章

A. 知恵を願うソロモンの祈り。I 列王記３－４章
B. 神殿の建設。I 列王記５－８章
C. ソロモンの名声。I 列王記９－１０章
D. ソロモンの恥辱と死。I 列王記１１章

III. 王国の分裂（分裂した王国の王たちの年代表参照）I 列王記１２章－II 列王記１６章
IV. アッシリヤによるイスラエル捕囚。II 列王記１７章
V. ユダの衰退と、バビロンによる捕囚。II 列王記１８－２５章

１章

テーマ: アドニヤの不成功に終わったクーデター。ソロモン、王として油そそがれる。

列王記は、サムエル記で始まった物語の続きです。この１章では、ダビデは高齢者になっています。彼の息子のひとり、アドニヤが王位を奪い取ろうとします。ナタンとバテシェバに促されて、ダビデは別の息子、ソロモンがイスラエルの王として油そそがれるように命令します。I 列王記のすごい始まりです、

ダビデの衰弱とアドニヤの企み

悲しい調子から始まります。

（I 列王記１：１）「ダビデ王は年を重ねて老人になっていた。それで夜着をいくら着せても暖まらなかった。」
ダビデは今は老人です。ダビデを老人として想像するのは、難しいものです。私たちはいつも、ダビデというと羊飼いの少年を考えます。介護の必要な高齢者としてダビデを思い浮かべるのは困難です。

彼の息子アドニヤはこの状態にいるダビデを利用します。彼は自分で王座に上がり、王になろうとします。もちろんそんなことは神さまのご計画には適合しません。多くの陰謀が行きかいます。陰謀は、ダビデの統治を特徴付けることのひとつです。

アドニヤとは誰か、見てみましょう。彼が、目立つ立場で書かれているのは I 列王記が最初です。

（I 列王記１：５－６）「一方、ハギテの子アドニヤは、『私が王になろう』と言って、野心をいだき、戦車、騎兵、それに、自分の前を走る者五十人を手に入れた。――彼の父は存命中、『あなたはどうしてこんなことをしたのか』と言って、彼のことで心を痛めたことがなかった。そのうえ、彼は非常な美男子で、アブシャロムの次に生まれた子であった――」
アドニヤはダビデの四男で、ヘブロンでダビデに生まれました。（II サムエル記３：４参照）

（II サムエル記３：４）「四男はハギテの子アドニヤ。五男はアビタルの子シェファテヤ。」

彼の母親は、ダビデの多くの妻たちのひとりハギテです。彼女については、その名前が「陽気な」という意味であること以外、何も知られていません。

「ハギテの子アドニヤは、・・・野心をいだき」（訳注：英文は「ハギテの子アドニヤは自分を高くし（Adonijah the son of Haggith exalted himself）」）この、“高くする”ということばは興味深いことばです。なぜなら、まさにそのことばの上にぴったり当てはまる聖書の箇所があるからです。

（ルカ１４：１１）「なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

「だれでも自分を高くする者は低くされ、」とはまさにアドニヤに当てはまります。彼は確かに自分を高くしました。

聖書には、アドニヤについて多くのことが語られています。彼は自己中心でとても高慢な若者でした。彼はうぬぼれており、ダビデに対して謀反を起こした異母兄弟アブシャロムと同じ特徴が、彼の中にもいくつかあることに気づかれるでしょう。まだ起こしてはいませんでしたが、アドニヤもまた、自分の父に対して謀反を

起こすところでした。ダビデは、自分の家族をちっともしつけていませんでした。彼の家庭生活は混乱していました。ダビデの宮廷は、組織化された混沌に支配されており、アドニヤはその状況を大いに利用しました。ダビデは彼を叱ったことがありませんでした。彼が間違ったことをしたときには、年老いた、甘い人物がするように、ダビデはこの若者に向かってただ微笑んだのではないかと私は思います。

（Ⅰ列王記1：7）「彼はツェルヤの子ヨアブと祭司エブヤタルに相談をしたので、彼らはアドニヤを支持するようになった。」
何年もダビデに忠誠を誓って来たヨアブが、今、アドニヤにくみしています。彼の立場を理解することができるでしょう。彼は状況を利用して、将来に備えているのです。ダビデは年老いており、もう少しで死んでしまうでしょう。ヨアブは勝ち組のほうにつきたいのです。このとき王座に向かって何かの行動を取っているのは、アドニヤただひとりです。ヨアブは、ダビデの宮廷で、とても大きな影響力を持っていました。ヨアブは一番最初からダビデの右腕であり、私は、彼がダビデに忠実であったと確信しています。アドニヤにはダビデの髪の毛一本にさえも手を触れさせなかったと思いますが、ヨアブはこのときに王座につく人がだれか欲しかったのです。ダビデのほかの息子たちはだれもそれにふさわしくなかったようです。ということは、ヨアブは王としてソロモンを選びはしなかった、ということになります。私の判断では、ダビデの選択はソロモンではなくアブシャロムでした。そして今、おそらくダビデは、アドニヤが王座に向かって動くのを見て、ダビデは微笑むことでしょう。なぜなら、アドニヤはアブシャロムに良く似ていたからです。

さて、アドニヤはバンクェットを開きました。何をするにも、支持を得るためにはバンクェットは良い方法です。もし何かしたいなら、教会でバンクェットをしてごらんなさい。多くの支持を得ることができますよ。

（Ⅰ列王記1：9）「アドニヤは、エン・ロゲルの近くにあるゾヘレテの石のそばで、羊、牛、肥えた家畜をいけにえとしてささげ、王の子らである自分の兄弟たちすべてと、王の家来であるユダのすべての人々とを招いた。」
アドニヤはバンクェットの席で自分が王であると宣言しようとしていました。長男相続権によって、彼にはおそらく王位を主張する権利があったのでしょう。彼はソロモンよりも年長だったと書かれています。この当時の決まりによれば、最年長の息子がいつでも皇太子であり、跡継ぎでした。もちろん、アブシャロムは死にましたから、アドニヤはその次でした。

王の息子たちに招待状を出したというのは、特に、ソロモンは招待を受け取ってはいない、という事実に照らせば、大胆な動きでした。ソロモンは取り残されました。

（Ⅰ列王記1：10）「しかし、預言者ナタンや、ベナヤ、それに勇士たちや、彼の兄弟ソロモンは招かなかった。」
アドニヤは、ナタンがバテ・シェバの味方であることを知っていました。ナタンは、ダビデのあの大きな罪の期間に、ダビデを導いたその人でした。もちろん、バテシェバはソロモンの母親でした。今、ナタンはバテ・シェバのところに行きます。

ナタンとバテ・シェバの計画

（Ⅰ列王記1：11）「それで、ナタンはソロモンの母バテ・シェバにこう言った。『私たちの君ダビデが知らないうちに、ハギテの子アドニヤが王となったということを聞きませんでしたか。』」
アドニヤはダビデの背後で動いていました。彼はなにひとつ王には相談しませんでした。今、ナタンが動き始めます。

（Ⅰ列王記1：13）「『さあ、ダビデ王のもとに行って、「王さま。あなたは、このはしために、必ず、あなたの子ソロモンが私の跡を継いで王となる。彼が私の王座に着く、と言って誓われたではありませんか。それなのに、なぜ、アドニヤが王となったのですか」と言いなさい。』」
ダビデはバテ・シェバに約束をしました。彼らのふたり目の息子が生まれたとき、（最初の息子は死んでしまいました）ダビデはその子が次の王になる、と言って彼女に約束したのです。その息子がソロモンです。今、

ダビデはソロモンを王座につけるために、何の動きもしていません。ダビデは彼を王にすることには熱心ではなかったのではないかと思います。

（Ⅰ列王記1：14）「『あなたがまだそこで王と話しているうちに、私もあなたのあとから入って行って、あなたのことばの確かなことを保証しましょう。』」
ナタンは、
「何が起こっているか、私たちがダビデ王に注意を促したほうが良いでしょう。私があなたのことばを保証しましょう」
と言いました。ナタンは、ダビデの膝元で何が起きているか、この高齢の王の目を覚まして見せたかったのです。

（Ⅰ列王記1：15－16）「そこで、バテ・シェバは寝室の王のもとに行った。──王は非常に年老いて、シュネム人の女アビシャグが王に仕えていた──バテ・シェバがひざまずいて、王におじぎをすると、王は、『何の用か』と言った。」
ダビデは長いことバテ・シェバに会っていなかったように見えます。

（Ⅰ列王記1：17－20）「彼女は答えた。『わが君。あなたは、あなたの神、【主】にかけて「必ず、あなたの子ソロモンが私の跡を継いで王となる。彼が私の王座に着く」と、このはしためにお誓いになりました。それなのに、今、アドニヤが王となっています。王さま。あなたはそれをご存じないのです。彼は、牛や肥えた家畜や羊をたくさん、いけにえとしてささげ、王のお子さま全部と、祭司エブヤタルと、将軍ヨアブを招いたのに、あなたのしもべソロモンは招きませんでした。王さま。王さまの跡を継いで、だれが王さまの王座に着くかを告げていただきたいと、今や、すべてのイスラエルの目はあなたの上に注がれています。』」
ダビデは、何人かいる息子たちのうちから、まだ誰をも後継者に選んではいませんでした。おそらく、アドニヤはとても魅力的で、ハンサムで、能力もある若者だったので、彼に次の王になって欲しい、という人たちが大ぜいいたことでしょう。

（Ⅰ列王記1：21－24）「『そうでないと、王さまがご先祖たちとともに眠りにつかれるとき、私と私の子ソロモンは罪を犯した者とみなされるでしょう。』彼女がまだ王と話しているうちに、預言者ナタンが入って来た。家来たちは、『預言者ナタンがまいりました』と言って王に告げた。彼は王の前に出て、地にひれ伏して、王に礼をした。ナタンは言った。『王さま。あなたは「アドニヤが私の跡を継いで王となる。彼が私の王座に着く」と仰せられましたか。』」
ナタンとバテ・シェバは、ダビデがアドニヤを自分のあとに治めるものとして選んだのかどうか、知りたかったのです。もちろんダビデは、何も知りませんでした。

（Ⅰ列王記1：28－30）「ダビデ王は答えて言った。『バテ・シェバをここに呼びなさい。』彼女が王の前に来て、王の前に立つと、王は誓って言った。『私のいのちをあらゆる苦難から救い出してくださった【主】は生きておられる。私がイスラエルの神、【主】にかけて、「必ず、あなたの子ソロモンが私の跡を継いで王となる。彼が私に代わって王座に着く」と言ってあなたに誓ったとおり、きょう、必ずそのとおりにしよう。』」
ダビデがバテ・シェバにソロモンのことを語るとき、彼が「私たちの子」ではなく「あなたの子」と言ったことに注目してください。ダビデはこの子に関して、あまり熱心ではありませんでした。これからすぐ見ますが、ダビデとソロモンの間には、たいした共通点がなかったのではないかと思います。

（Ⅰ 列王記1：31－33）「バテ・シェバは地にひれ伏して、王に礼をし、そして言った。『わが君、ダビデ王さま。いつまでも生きておられますように。』それからダビデ王は言った。『祭司ツァドクと預言者ナタン、それに、エホヤダの子ベナヤをここに呼びなさい。』彼らが王の前に来ると、王は彼らに言った。『あなたがたの主君の家来たちを連れ、私の子ソロモンを私の雌騾馬に乗せ、彼を連れてギホンへ下って行きなさい。』」
馬が戦いのための乗り物である一方、騾馬は、王が乗る乗り物でした。黙示録の中で、4頭の馬に乗っているのは混乱と戦いであることが分かるでしょう。また、主イエス・キリストがこの世にもう一度来られるときに

は、戦いを語る白い馬に乗って来られます。主はこの地上の反抗を鎮められますそして主の前に、すべての者はひざをかがめます。主が最初に来られたときには、主は戦争を起こすために来られたのではありませんでした。主は、ご自分をイスラエルのメシヤとして与えるために来られました。そして、エルサレムに入るときには、小さなろばに乗られました。王たちが乗ったのはそのような動物でした。今、ダビデ自身の高貴な乗り物、騾馬が引き出され、ソロモンがその上に乗せられようとしています。

ソロモンが油そそがれて王となる

（Ⅰ列王記1：38－39）「そこで、祭司ツァドクと預言者ナタンとエホヤダの子ベナヤ、それに、ケレテ人とペレテ人とが下って行き、彼らはソロモンをダビデ王の雌騾馬に乗せ、彼を連れてギホンへ行った。祭司ツァドクは天幕の中から油の角を取って来て、油をソロモンにそそいだ。そうして彼らが角笛を吹き鳴らすと、民はこぞって、『ソロモン王。ばんざい』と叫んだ。」
もう、ダビデが自分の後継者に誰を選んだかに疑問の余地はありません。ソロモンが次の王になるのです。

（Ⅰ列王記1：40－41）「民はみな、彼のあとに従って上って来た。民が笛を吹き鳴らしながら、大いに喜んで歌ったので、地がその声で裂けた。アドニヤと、彼に招待された者たちはみな、食事を終えたとき、これを聞いた。ヨアブは角笛の音を聞いて言った。『なぜ、都で騒々しい声が起こっているのだろう。』」
アドニヤに詳しいことを知らせに来た使者は、次のようにしめくくりました。

（Ⅰ 列王記1：47－49）「『そのうえ、王の家来たちが来て、「神が、ソロモンの名をあなたの名よりも輝かせ、その王座をあなたの王座よりもすぐれたものとされますように」と言って、私たちの君、ダビデ王に祝福のことばを述べました。すると王は寝台の上で礼拝をしました。また、王はこう言われました。「きょう、私の王座に着く者を与えてくださって、私がこの目で見るようにしてくださったイスラエルの神、【主】はほむべきかな。」』」
ダビデは、王としてのソロモンに自分の承認の印を押しました。ダビデは年寄りで、まもなく彼の先祖とともに眠るのです。

（Ⅰ列王記1：49－50）「すると、アドニヤの客たちはみな、身震いして立ち上がり、おのおの帰途についた。アドニヤもソロモンを恐れて立ち上がり、行って、祭壇の角をつかんだ。」
アドニヤの支持者たちは、恐れて、あわてて立ち去りました。彼らは自分たちが裏切り者と思われることを知っていました。アドニヤは自分のいのちが取られることを恐れて、会見の天幕に走って行き、祭壇の角をつかみました。

（Ⅰ列王記1：51－52）「そのとき、ソロモンに次のように言って告げる者がいた。『アドニヤはソロモン王を恐れ、祭壇の角をしっかり握って、「ソロモン王がまず、このしもべを剣で殺さないと私に誓ってくださるように」と言っています。』すると、ソロモンは言った。『彼がりっぱな人物であれば、彼の髪の毛一本でも地に落ちることはない。しかし、彼のうちに悪があれば、彼は死ななければならない。』」
ソロモンは、アドニヤをとても公平に扱います。もしアドニヤが忠実な家来であることを示すなら、アドニヤには何も起こりません。

（Ⅰ列王記1：53）「それから、ソロモン王は人をやってアドニヤを祭壇から降ろさせた。彼がソロモン王の前に来て礼をすると、ソロモンは彼に言った。『家へ帰りなさい。』」
王の前に連れてこられたアドニヤは、新しい王に従いました。そして、ソロモンは平和裏に彼を家へ帰しました。